



みずみどり

2018年 7月15日 第127号

発行：いたばし水と緑の会事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://mizumidori2.eco.cocan.jp>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

生き物の世界をそっと見てね

夏は、卵から孵って大きくなった昆虫たちが、精一杯生きて、卵を産み、そしてほとんどが冬には死んでしまう、短い命が輝く季節です。そこで、とんぼ池やバッタ広場で出会った生き物達を紹介します（コメントは釣巻岳人）。



オオシオカラトンボ 後には産卵警護のみがいる。トンボのグループにより、繋がったまま産卵か、産卵警護が決まっていたと思う。



アブラムシ アブラムシが植物を刺すと葉が捲いたり、膨れたりする、これをアブラムシが隠れ家などに利用する。植物側の反応はどういう機構なのだろう。アブラムシの世界は非常に面白いようです。アブラムシを材料に昆虫の社会性を研究する学者は世界中にいます。



クサカゲロウの卵 電球のカサなどに昔はよくついてた。優曇華の花などと言って通じるのはどの世代までであろうか。



トホシテントウ テントウムシ科はアブラムシなどを食べる肉食昆虫だがトホシテントウが属するマダラテントウのグループは植物食で、しかもナス類やウリ類など有毒成分を持った植物の葉を食べるグループ。マダラテントウ類の種分化は現代昆虫学の主要なテーマの一つでしょう。



ビロウドハマキ 20年前頃から東京付近で見られるようになったが、良く似た山地性の種がいるが、こちらは町の中にいない。



アワフキムシの幼虫 アワの中にいる幼虫を魚釣の餌にした経験があります。

いたばし水と緑の会では、美術館横のとんぼ池と城址のバッタ広場の観察会をしています。第2日曜日10時とんぼ池集合。どなたでも参加できます。



ヨコヅナサシガメ こんなのが東京で見られるようになるとは夢にも思わなかった。



ミスジアツバ ヤガ科、赤塚公園では普通種

注) ヨコヅナサシガメは帰化昆虫

光が丘公園で“カブトムシの幼虫”発見!

5月6日(日)、都立光が丘公園の林の中を散策していると落ち葉がたつぷりと重なったところがありました。そこを枝でさがすとほじってみると、白くて丸い物体が。それはなんとカブトムシの幼虫でした。



東京23区の公園にカブトムシの幼虫がいるなんて感激です。しばらく眺めて手に持った後、土の上においてあげると急いで土の中に潜っていきました。

光が丘公園があった地域はもともとは、田畑が広がっていたそうです。しかし戦争となり、日本軍の飛行場(成増飛行場)となりました。戦後、その飛行場はアメリカに没収され、グラントハイツというアメリカ人居住区となりました。そして1970年代にグラントハイツは日本に返還され、今の光が丘公園になったということです。

かつてこの地域にはいくつかの川(百々向川、前谷津川など)も流れていて、それらの流れは白子川や新河岸川などにたどりついていたそうです。しかし、戦後の宅地開発、

川の汚染、洪水対策などのためそれら川に蓋がされ(暗渠化)され、今はその姿を見ることがありません(なんだかさびしい)。

この地域に川が流れていた当時は、そこに自然があり、自然の生き物がたくさんいたことでしょう。当時の子どもたちは自由に虫や生き物を捕まえたり、触れたり、遊んだりすることができたのではないかと思います(そうやって想像すると当時の自然豊かな板橋区や練馬区がうらやましくなります。少しでも当時の自然を子どもたちや未来の板橋区や練馬区のために取り戻せない

だろうか、と思わされます)。

しかしながら、今となってはそういった自然はほとんどなくなり、光が丘公園も役所や公園管理の方々の努力なしには維持できないいわゆる人工的な自然となっています。

そんな人工的な自然のなかでも懸命に生きようとしているカブトムシの幼虫たちに感激した次第です(紫垣伸也)。

庭のカマキリのこと

この春花後の椿の木を剪定し、切り取った枝葉を整理したところカマキリの卵(卵鞘)が2つ出てきたので大事に保管した。以前に落葉樹に産み付けた卵をシジュウカラが啄ばみ、中の卵を全部喰い尽したのを目撃しているが、常緑樹の繁みの中に産み付けるとは、カマキリが勉強したのだろうかと感じた。2つの卵鞘はその形からオオカマキリ(写真左)とハラビロカマキリ(写真右)、昨年夏オオカマキリの姿は見たが、ハラビロもいたのとは知らなかった。

孵化して幼虫がぞろぞろと生まれるところを見たいと思っていたのだが、気付いたときには、糸くず状の紐が垂れ下がっていて後の祭りだった。

そこで庭の草木を調べると、あちこちに小さなカマキリが見つかった。菊の大株にオオカマキリが2匹いたが、大体が1匹ずつ離れ陣取っているようだ、餌を確保するためのテリトリー確保や、共食いされないための習性だろう。



オオカマキリの幼虫



ハラビロカマキリの幼虫

写真から分かるように、オオカマキリは体を真っすぐにして水平に止まっているが、ハラビロは背中を逆エビ状に反らせて止まっていることが多い。胸から頭を持ち上げ自分を大きく見せるとか威嚇する体形のように思えるが、本当はどうなのだろう。更に、オオカマキリは近づいても余り動じない?が、ハラビロは葉裏に隠れてしまい写真を接近して撮るのに注意を要した。

1つの卵鞘に300位の卵があるというが、何匹が成虫まで生きていけるのだろうか、狭い庭で

は数百匹は過密だから、外へ出てゆくものもいるであろうが、食物連鎖の上位の天敵であるカナヘビやヒキガエル、飛んでくる野鳥などもいるので生存は大変厳しいが、餌となる小さな害虫の駆除に活躍してほしいものだ。(猪鼻昭二)

オタマジャクシの消息



とんぼ池にいっぱいいたオタマジャクシは今年もカエルになる前に消えてしまいました（ほとんどがカルガモのお腹に入ったみたい）。山田さんが一部を持ち帰って飼育し、赤ちゃんカエルを池の裏山に放しました。1円玉に乗っているカエルは小さくて大きなヒキガエルの子ともとは思えません。ほとんどのオタマジャクシは食べられてしまい、そしてカエルになっても、生き残れるのはわずかだそうです。

赤塚の湧水異変

下は、本橋金藏さんが、付近の区画整理が始まる前（昭和40年頃）に不動の滝の裏山あたりから撮影した写真です。不動の滝の裏山と城址につながる山の間は田んぼがあり、一帯は湧き水が多く、サワガニがたくさんいたそうです。



区画整理によって山が削られ道路ができ、景色は変わりましたが、不動の滝と大仏の間の谷は今でも、湧き水が多い地域です。

平成元年頃から板橋区は「都市の水循環回復事業」のなかで、一帯の湧水を守るために、一



軒一軒、民家をお願いして雨水浸透枿をつけてもらう取り組みをしました。平成18年には、板橋区湧水保全条例を制定し、また不動の滝周辺と赤塚城址・植物園周辺を湧水保全地域に指定しました。しかし、時が経過し、湧き水のことは忘れ去れたようです。

6月10日、観察会の後、湧き水の異変を教えられ呆然としました。とんぼ池の水源付近の斜面が削られ、大量の湧水があふれ出て下水に排水され、とんぼ池に入る湧水も減少していました。土砂崩れを防ぐためのコンクリート擁壁工事でした。工事をした土木部

計画課は、湧水がある場所だということも、湧水保全地域であることも知りませんでした。掘削してあふれ出た湧水は下水に流さないでとんぼ池に来ようお願いします。が、少しずつ出ていた周辺の湧水やしみ出しは、干上がってしまうと思われます。また、工事が終わるまでの間、掘削により水は泥水になり、コンクリート工事によってアルカリ性になるため下水に排水するそうです。どのくらいの量の湧水がどこくらいの期間下水に排水されるのかわかりませんが、とんぼ池は干上がるかもしれません。私たちは、単にとんぼ池の水源として湧水を利用しているのではありません。立ち寄った人は「湧き水なの？自然はいいねえ」と感心されます。ご近所の人達は湧水の流入口で、今日も湧き水がちゃんと来ているか確認されます。とんぼ池は水の恵みを意識する場所なのです。

水循環—地球上の水は増えもせず、減りもせず循環しています。雨になり、地面にしみこんで地下水になり、川の水になり、海に行き、蒸発して雲になり、また雨になり・・・。地表面をコンクリートで覆って自然の水循環が阻害されると、少しまとまった雨が降ると水浸しになったり、川があふれそうになったり、猛暑や熱帯夜などの不快な夏をもたらしています。湧き水を守ることは、木や草など自然の地表面を守ることであり、雨水を浸透させることの大切さを感じることに繋がります。

同じ頃、対岸の不動の滝も人災にあった。

見ると滝の裏山がスカスカになり、元々少ない滝水もすっかり心細い状態になっていました。裏山は国有地で以前は自然のまま維持されてきたようですが、緑と公園課が「木が茂っているので林床を明るくして草が生えるように木を切った」そうです。地盤を保持し地下水をはぐくむ力は、広葉樹の大木が最も大きい。そして広葉樹>針葉樹>小さい木>草>ただの土、と小さくなります。また木の葉



は雨粒が地面に直にあたる衝撃をやわらげます。それなのに公園課では樹林地の木を切り、林内の草も刈ってしまいます。表土を大切にしてほしいと思います。

板橋区の史談会が編集した、「いたばし郷土史事典」には「こんもりとした大木の茂る森の中に昔から涸れたことのない不動の滝があり、滝壺の上には二体の不動尊の石像が祀られている。・・・江戸時代の中頃に大山詣、富士詣が流行して、道人は滝に打たれ、心身を清めて参詣に出発したが、ここはそのみそ

ぎの跡でもある・・・」とあります。今でも不動の滝講があって、祭事もあり、滝壺の掃除もされています。

不動の滝は、平成14年度東京都の名湧水57選に選ばれました。都は名湧水の選考条件として、湧水量の多少だけではなく、地域の保全活動をあげていました。地元の「不動の滝講」と環境行政の



湧水保全事業が名湧水の後押しをしたと思います。

約30年が経過し、雨水浸透柵を設置した住宅も建て替えられ、新たな雨水浸透柵設置事業もなくなりました。水循環回復には、もう形だけでない対策が必要でしょう。

「板橋をふるさとに」と言った区長さんがいました。行政は、昔から大切にされ、涸れたことのない不動の滝に、とどめの一撃を加えることのないよう、湧き水が涸れない不動の滝の奇跡のために、適切な管理と保全の取り組みをお願いしたいと思います（坂本 郁子）。

活動のお知らせ

運営委員会：7月28日（土）12：30～13：30

8月25日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先；坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：9月15日（土）12：30～

活動の問い合わせ等は事務局 瀬田（3969-7124）まで

1 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、バッタ広場）の手入れ

7月28日（土）10：00～11：30 バッタ広場 クズ、外来種の抜き取り

8月25日（土）10：00～11：30 場合によっては夏休み

集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）（予定を変更する場合があります）

雨天の場合は中止または延期します。連絡先：坂本（090-4618-1295）

2 トンボ池・城址・バッタ広場の自然観察会

日時：8月12日（日）10：00～11：30

9月 9日（日）10：00～11：30

集合場所：赤塚トンボ池（板橋区立美術館そば）

持ち物：飲み物、蚊の対策（長袖など）、あれば昆虫網、図鑑、ルーペ、双眼鏡

小雨でも実施します。トンボ池はいつも入れないフェンスの中も観察します。

3 日暮台公園樹林地の観察

8月4日（土）、9月1日（土）いずれも10：00～11：30 日暮台公園前集合

（連絡は坂本 090-4618-1295まで）

木が切られて、明るい斜面林になりました。疎林の緩斜面も斜面樹林地も草を刈らないようお願いしています。ツルツルの林床に草や落葉が戻り、雨が浸透する地面にするのが目標です。そして日暮台公園の「ちょっとだけビオトープ化」ができないかも考えます。

●ビオトープボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。

作業や観察会で身近な自然を発見するのが楽しいです。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。